荒川ナッシュ医 | ペインティングス・アー・ポップスターズ
Paintings Are Popstars

PRESS
RELEASE
2024.10.04

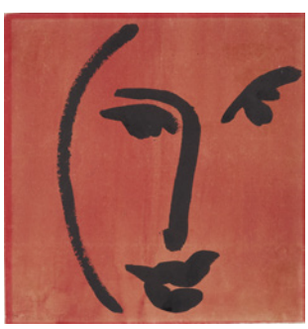
アンリ・マティス

×

松任谷由実

with

松任谷正隆



アンリ・マティス《顔》
筆と墨／紙、24 × 23 cm
1951 年
読売新聞社

「小鳥曜日」

長年アンリ･マティスを愛するユーミンが、第二次世界大戦中のニース時代のマティスを想って新曲「小鳥曜日」を制作。1951 年に読売新聞社へマティス自身が寄贈した三点のドローイング作品《顔》を展示し、「人と絵画は時間の感じ方が違う」という松任谷正隆の発想から、通常の絵画展とは全く違う空間がインスタレーション・アートとして実現します。

アンリ・マティス (1869-1954)
マティスは、強烈な色彩を操ったフォーヴィスム（野獣派）の中心的な画家として活躍し、「色彩の魔術師」と評されるほどの優れた色彩感覚に絶妙な造形感覚をかけ合わせ、パブロ・ピカソと並んで美術史上に残る数々の傑作を生み出した。晩年は、彩色した紙をハサミで切った切り紙絵や、墨を用いたデッサンなどを手がけていた。

松任谷由実からのコメント

もしマティスの絵が、何かを呟いたとしたら、、というテーマに、
私は一瞬でコートダジュールの深い空の色を想い浮かべた。
強烈な陽差しに溶けてゆく鳥影。
あのときあとにした戦禍のパリが、ひどく恋しかったかもしれない。

松任谷由実
1954 年、東京都生まれ。シンガーソングライター。1972 年、多摩美術大学在学中にシングル「返事はいらない」で荒井由実としてデビュー。「ひこうき雲」、「やさしさに包まれたなら」、「あの日にかえりたい」、「恋人がサンタクロース」、「守ってあげたい」、「リフレインが叫んでる」、「真夏の夜の夢」、「Hello, my friend」、「春よ､来い」等､多くの名曲を残す。通算 40 枚目になるオリジナルアルバムを制作中。

松任谷正隆からのコメント

美術館の中での時間は自由です。
誰もが過去や未来に思いを馳せながら作品を楽しみます。
荒川ナッシュさんはその自由を束縛しようと考えた・・・と僕は解釈しました。
そこで僕は束縛された自由を提案してみました。

松任谷正隆
1951 年、東京都生まれ。4 歳からクラシックピアノを習い始め、14 歳の頃にバンド活動を始める。1971 年、加藤和彦に誘われ、ミュージシャン・デビューを果たし、キャラメル・ママやティン・パン・アレーなどのバンドに参加。その後アレンジャー、プロデューサーとして、松任谷由実を筆頭に、松田聖子、ゆず、いきものがかりなど、多くのミュージシャンの作品に携わる。

特別イベント「旅立つ秋」
11 月 16 日（土）18:00 から閉館までは、通常はローテーションにより 20 分に 1 度しか聞けない「小鳥曜日」を繰り返し楽しむことができます。当日は国立新美術館のロビーにて「旅立つ秋」と題し、荒川ナッシュと来館者による「小鳥曜日」についてのトークイベントを開催いたします。（ユーミン、松任谷正隆本人の出演は予定しておりません。）

新曲「小鳥曜日」は、荒川ナッシュゲスト出演のもとラジオ番組でオンエアされます。会場以外で聞く事が出来るのはラジオ番組のみです。ぜひ注目ください。

◆11 月 15 日（金）、22 日（金）
『Yuming Chord』
（毎週金曜 11:00 ～ 11:30 放送 TOKYO FM/JFN 全国 38 局ネット）

◆11 月 15 日（金）、22 日（金）
『松任谷正隆の…ちょっと変なこと聞いてもいいですか？』
（毎週金曜 17:30 ～ 17:55 放送 TOKYO FM）

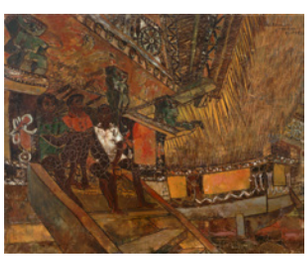
丸木俊

×

寺尾紗穂

「ミクロネシア三景」

2004 年よりサイパンやパラオなどで旧日本統治時代を知る人々を訪ね、ノンフィクションを発表しているシンガーソングライターの寺尾紗穂。彼女が埼玉県の丸木美術館を訪問し、丸木俊の 3 点の絵画《ヤップ島の物語》、《パラオ島》、《アンガウル島に向かう》の前で楽曲のインスピレーションを得た。民族楽器奏者、歌島昌智の協力によって、当時のパラオの労働者に想いを馳せた丸木の視点に寄り添うような楽曲が完成した。本展では、この 3 点の絵画作品から楽曲が聴こえてくるようなインスタレーションを発表する。



丸木俊（赤松俊子）《パラオ島》
油彩／カンヴァス、72.7 × 90.9 cm
1940 年
丸木ひさ子氏蔵

丸木俊（赤松俊子）（1912-2000）
日本の画家。1940 年に日本統治下の南洋諸島へ渡り、短期ながらも民俗学者・土方久功の協力で現地の住民の生活に溶け込み、そこで暮らす人々の姿を描いた。帰国後の 1941 年に丸木位里と結婚し、原爆投下直後に広島を訪れた経験をもとに、1948 年から位里と共同で《原爆の図》の制作を開始した。原爆による悲惨な情景を強く訴えるこの作品は、世界各地を巡回して展示された。

Photo: Hiroyuki Takenouchi

寺尾紗穂からのコメント

丸木俊には旧南洋群島での滞在を経て残した作品があります。
俊の島民への眼差しを感じる作品、逆にスケッチする俊を眺める多様な眼差しが写し取られたものもあります。
彼女が南島で彼らをよく見、また無邪気に交流した時間。
その島風を追いかけて音をもらいました。

寺尾紗穂
1981 年東京都生まれ。音楽家、文筆家。2007 年にピアノ弾き語りによるアルバム『御身』でデビュー。オリジナルの創作と並行して、埋もれた古謡の発掘やリアレンジしての録音、演奏、調査も続けている。文筆家としても、新聞やウェブなどで多数の連載を持つ。聞き書きに基づくノンフィクション・エッセイの執筆にも取り組み、著書に『原発労働者』『あのころのパラオをさがして　日本統治下の南洋を生きた人々』、『日本人が移民だったころ』などがある。9 月 18 日に 11 枚目のアルバム『しゅー・しゃいん』を発表。

荒川ナッシュ医 | ペインティングス・アー・ポップスターズ
Paintings Are Popstars

PRESS
RELEASE
2024.10.04

千葉雅也

＋

村瀬歩

「サマー・レンタル」

荒川ナッシュは、ジャンルに囚われないアメリカの美術家ラウシェンバーグが1960年に描いた4連作〈サマー・レンタル〉に基づき、4点のLED絵画を制作。その4点のLED絵画のために、哲学者千葉雅也が初めての戯曲を完成させました。短い散文的かつリズミカルな戯曲が、声優界のカウンターテナーとも呼ばれる村瀬歩の声によってインスタレーション・アートになります。

© 文藝春秋（Bungeishunju）

千葉雅也のコメント

今回、荒川ナッシュ医さんと「絵画同士が会話する」という状況について共に考え、それが初めての戯曲作品となりました。『センスの哲学』の表紙に掲げたものを含むラウシェンバーグの4枚の連作が、登場「人物」です。

千葉雅也
栃木県生まれの哲学者、作家。20世紀の哲学思想を起点とし、芸術、文化、社会について幅広く考察している。千葉はこれまで「私小説の脱構築」に関わる小説作品を発表し、時間、性、家族といった主題を描いてきた。理論的著作として、『動きすぎてはいけない——ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』（河出書房新社、2013）、『勉強の哲学』（文藝春秋、2017）、『現代思想入門』（講談社現代新書、2022、）、『センスの哲学』（文藝春秋、2024）など。小説作品に、『デッドライン』（新潮社、2019）、短篇「マジックミラー」（2021、『オーバーヒート』所収）、『エレクトリック』（新潮社、2023）など。

村瀬歩のコメント

アートと声のお芝居がどんな化学反応を起こすのか未知数なところも多いのですが、とてもワクワクしています！ 是非楽しみにお待ちくださると嬉しいです！

村瀬歩
1988年アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれ。声優。幅広い声色が特徴で、代表作に「ハイキュー！！」の日向翔陽役、「魔入りました！入間くん」の鈴木入間役、「あんさんぶるスターズ！」の姫宮桃李役、「怪盗ジョーカー」のジョーカー役、「Dr.STONE」の銀狼役、「王様ランキング」のカゲ役などがある。2016年、第10回声優アワードで新人男優賞（現：新人声優賞）を受賞。

ハトリ・ミホ
with
荒川ナッシュ医

Photo: Kimisa H

「Hello Hello Halo-Halo (ハロハロハロハロ)」

デイヴィッド・メダラ（1942-2020）の 1984 年の自画像を元に、荒川ナッシュは LED 絵画を制作。日本占領時代のマニラで泡をふきながら死にゆく日本兵を目撃した幼いメダラのエピソードを念頭に、ハロハロというフィリピンの代表的デザートが登場するハードコアなフード楽曲をハトリ・ミホが書き下ろします。

ハトリ・ミホのコメント

”〈他者〉がかかえる問題に取り込むことにより、人は自己に出会うこともある。”
　ー エドゥアール・グリッサン
今、一方的な大陸主義から、横軸のアジアとの関係性をもう一度、振り返る。
歴史の教科書に載っていない部分に光を当てて、私たちの独自の新しい
リミックスやポエトリーを捧げるときがやってきたね。
私たちに何ができるかな？

ハトリ・ミホ
ニューヨーク在住の音楽家、アーティスト、音楽プロデューサー、DJ。1994 年に渡米し、ニューヨークで本田ゆかとチボマットを結成後、2017 年に解散。ゴリラズ、ビースティー・ボーイズなどの作品に参加。2021 年にオリジナルアルバム『Between Isekai and Slice of Life (～異世界と日常の間に～)』を発表している。近年は、自作の映像を使ったコンセプチャルなパフォーマンスを美術館などで行っている。

キム・ゴードン

Photo：Danielle Neu

キム・ゴードン

「オノ・ヨーコの《インストラクション・ペインティング》のためのサウンド・イベント」

60 年前の前衛詩の本、オノ・ヨーコの《グレープフルーツ》（1964 年）からの《インストラクション・ペインティング》に反応し、キム・ゴードンが断片的な 47 の新トラックを制作。チャーリー XCX、ヤー・ヤー・ヤーズの鬼才プロデューサー、ジャスティン・ライゼンと共に、美術館のための初インスタレーションとなる。「想像力を体現しながら、ヨーコは他の誰も思いつかないようなアイデアを実現させる。」とゴードンは語る。

キム・ゴードンのコメント

オノ・ヨーコは、すべての女性のロールモデルの一人ではなく、
私のロールモデルだ。
《インストラクション・ペインティング》は、さらに多くのアイディアや、
新たなる世界の見方に繋がるような、絵画のあり方を提案する。
私もヨーコと同じように、自由な発想が尽きない人生を歩みたい。

キム・ゴードン

1953 年ニューヨーク州生まれのミュージシャン／シンガー・ソングライター。ロサンゼルスで育ち、その後、ニューヨークで 1981 年にサーストン・ムーアとオルタナティヴ・ロック・バンド、ソニック・ユースを結成。90 年代以降はフリー・キトゥンやボディ／ヘッドなどでも活動し、オノ・ヨーコらともコラボレーションを展開している。2024 年 3 月に 2 枚目のソロアルバム『The Collective』を発表し、フジロックフェスティバルにも参加したばかり。

楽曲・戯曲インスタレーションについて

・会場には日本語・英語の歌詞が展示されます。
・曲名やインスタレーションの詳細は変更になる場合がございます。
・各楽曲・戯曲インスタレーションの静止画撮影は可能です。
　ただし録画・録音はお控えください。
・各楽曲・戯曲は、ローテーションで再生されます。お時間に余裕を持ってお越しください。
・会場内は複雑な導線になっておりますので、入り口で配布されるマップをご利用ください。

荒川ナッシュ医によるコメント

2013 年のユーミンの曲から引用した展覧会タイトルは、わたしにとっての絵画は「みんな決めたミッション」を持っているポップスターであるという意味。今回は、覚悟を決めた、ブレないミュージシャンや、哲学者のみなさまにお願いして、個性的な絵画のために新たな作品を書き下ろしていただきました。美術館という空間が、彼ら彼女らのアティテュード（態度）で染まります。この秋は、ぜひ国立新美術館で会いましょう！

Photo: Ricardo Nagaoka

荒川ナッシュ医（あらかわ なっしゅ・えい）
1977 年福島県いわき市生まれ。1998 年からニューヨーク、2019 年よりロサンゼルスに居住する米国籍のクィア・パフォーマンス・アーティスト。様々なアーティストと共同作業を続ける荒川ナッシュは、「私」という主体を再定義しながら、アートの不確かさをグループ・パフォーマンスとして表現している。近年の個展にテート・モダン（ロンドン、2021 年）があり、来年はミュンヘンの現代美術館ハウス・デア・クンストで個展を予定している。ホイットニー・ビエンナーレ（ニューヨーク、2014 年）やミュンスター彫刻プロジェクト（2017 年）などの国際展にも参加、パブリック・コレクションに、ニューヨーク近代美術館、ルートヴィヒ美術館（ケルン）がある。ハーバード大学、UCLA で教えた後、現在はアートセンター・カレッジ・オブ・デザインの大学院でパフォーマンス・アートを教える。